

『命を懸けた野球観戦』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



Kさんは看護師で、僕が訪問診療を始めた頃、とある施設の看護師として働いていた。

Kさんは、愛と情熱の人。入居者さんを一人の人として大切に、どうすることがその人やその人の家族の喜びや笑顔に繋がるのだろうかいつも考えながら仕事をする人だった。ある時、施設側のダメな対応に対して僕が施設長に厳しい意見を伝えたところ、Kさんは直ぐにクリニックまでやってきて、Kさんがダメな対応をしたわけでもないのに、自分の指導や目配りが行き届いていなかったからと涙ながらに謝罪をするのだった。それ程までに、より良いケアや関わりを常に追求していた。当時、その施設の施設長と理事長も、Kさんと同じ温かい心と熱い志を持っている人だったので、僕が訪問医として関わっている施設の中で、その施設は圧倒的にピカイチだった。

色々な事情が重なって、Kさんはその施設を離れることになり、Kさんとは会う機会もなくなった。

Kさんの父親(Tさん)が、脾臓癌・多発肝転移による終末期状態となり、Kさんは、独居生活をしていたTさんを自宅に引き取って世話をすることに決めた。時として、人には親子であるが故に抱える傷や葛藤もある。何の躊躇もないわけでもなかったが、困っている父親を見て放っておけるKさんではなかった。

訪問診療でKさんの自宅を訪れるようになり何回目かの訪問の際、日本ハムファイターズのファンでありながらエスコンフィールドを訪れたことがないTさんを連れて、試合を観戦にエスコンに連れて行く計画があることを知った。Tさんは特に水谷瞬選手が好きだったが、左手首骨折で戦線離脱していた水谷

選手は、その時点ではまだ2軍で調整中だった。が、運命の6月10日前日の6月9日、なんと水谷選手は1軍に登録され、遂にその日はやってきた。常識的に見て、とても野球観戦に行けるような状態ではなく、車椅子に30分も座っていられるとは到底思えない。しかし、Kさんたちは、Tさんが途中で息絶えても構わない位の覚悟で、エスコン行きを決行した。「途中で亡くなるようなことがあっても、慌てず僕に連絡をしてもらって、とにかく家まで連れ帰って来てください」と伝え、そのつもりです、という返答が返ってきた。文字通り命懸けの野球観戦。車中でぐったりしていたKさんは、しかし、車椅子に乗せられて球場の正面玄関に着くや、シャキッと背筋が伸び、キリっとした顔つきになった。果たして、最前線にしている水谷選手は、その復帰戦で、同点ホームランと決勝タイムリーを放ち、3打点の大活躍を果たし、今シーズン初のお立ち台。ヒーローインタビューの後、背の高い車に乗って球場を周る水谷選手と目が合ったと喜びつつTさんは球場を後にした。

日付が6月11日に変わる直前に自宅に生還したTさんは、精魂尽き果て眠り続けた。6月13日の早朝、臨終間近と思われたTさんは、家族に向かって「コーラ」と言った。家にコーラはなく、騙せるだろうと思ってCCレモンを飲ませたところ、虫の息で「これじゃない」。急いで孫がコンビニに走った。コーラを三口舐めたTさんは満足げに顔き、その直後、午前9時過ぎ、人生の幕を下ろした。ベッド脇には、日ハムがホーム試合で勝利した時にだけ販売される金色のしゃけまるが揺れていた。

